

## 福祉の神髄（？）

「重症児が地域で生活するために」をテーマのシンポジウムについては、当HP「公園デビュー制度（？）」に記載もしています。シンポジウムの中で、母親が障害のある子どもを産んだ、またその可能性のあることを最初に宣告する医療機関から地域の支援への繋ぎの問題に触れた時、707-から、ある母親から障害児を産んだ時の産婦人科、小児科の「ドクターハラスメント」の実体験、また、最初に自分を支えてくれたのは同じ境遇の親であり、その紹介で出会った理解ある医師に始めて人間としての対応と話しかけをしていただき、その後も寄り添ってくれている等の話を引き出せたのは、コネクターの私自身としてはよかったと思っている。

最近、マスコミでも、一般医療機関の「ドクター」の実態が取り上げられています。まして、障害児を産んだという母親の精神的混乱、動揺は、我々の想像以上でしょう。その折りに最初に接するのは、医療機関の医療従事者（医師、助産師、看護師等）です。

子どもの障害を家族に最初に宣告する医療機関の「ドクター」の実態も明らかにしていくことも、「地域で生活を…」という問題を検討する時の、地域側の最初の検討問題と私は思います。

「地域で生活」ということは、その地域の意識も変わって行かなくてはなりませんよね。地域の人々（医療機関を含め）が、障害児とその家族に寄り添い、支えていく意識があつてこそ、「地域で生活」という言葉が実感あるものになると思います。単に、地域に福祉施設、制度が充実することだけでは、成熟した地域（社会）とは言い難いと思います。そこに、地域の福祉社会の神髄があると考えています。

（シンポジウム後に、まず、「ドクター問題」提起のためにも事例収集が大切と思い、発言の母親には、お仲間の母親からも事例を聴取しておいたらと声をかけてはみましたが…。）

（2003年03月09日記）